數の諸賢人、その外自餘の父母兄弟自他の親族朋友まで、生前死後、いづれの所に如何樣になりて落在すと、手の中の物を見る如く分明に見徹せざれば、まことの佛道の師にあらず、若しかくの如くならずんば生死自在を得る大解脱の人とはいはじ。此の如く老僧幼年初心の事までを談ずるも、唯人をして眞實の修行をなさしめんが爲也。大德綿々密々に工夫をなすべし。

十四　和光行脚の時學士に逢ふことを示す事

師一日衆に語りて曰く、むかし老僧和光行脚の時、越後の國にゆく、ある太守の家中に一千石を領する士あり、早歲より好學にして文才甚だ多し、近隣の各寺和尙長老と雖も是に敵する人なきが如し。よつて四書五經朱子の註釋を本として、佛法をけづり蔑ろにして僧侶を見ること奴僕の如し。その双親後日の果報をおそれて老僧をして異見を加へしめんとす。老僧即ち是に對面して云て曰く、佛法を削り惡まれし由承はる、佛法の本體、佛法の根源を能く〳〵見定めて、實に惡といふことを知りつくして、かく佛法を誹り惡み玉ふや、佛法のみにあらず、世間一切の事、能くその根源をつくさざれば、慥に善、慥に惡とは名はつけ難きもの也、士如何ぞや。士曰く、さて〳〵きびしき難問かな、これ程細なる問は始めて承はる、たゞ佛法は地獄ありと說き、鬼ありと說きて、すべて方便虛誕のみにして、元來何もなき事と思ひ、此によりて佛法をそしりたり。老僧曰く、さて〳〵學者に似合はざることかな、これつらのことを難問などゝいひ、或は佛法は唯方便虛誕のみにして元來何もなき事と思はれしこと恥かしきこと共也。佛法とは何物を名付けて佛法といふことを知り玉はず、却て佛法をそしり憎まるゝことを謬といはんか愚といはんか、言語道斷のこと共也、何物を名付けて地獄といひ、何物を名付けて鬼といひ、何物を名付けて佛法といふことを知り玉はずんば、何物を名付けて儒といひ、何物を名付けて明德といふことをも未だ知られまじ。抑も佛法佛道と呼びて、昔より名目の世間に流布し末代に響くことは佛法に慥に本體ある所也、本體慥にある故に、佛法と名をつけたり、たゞ佛法のみならず、世間一切の物、本體なき物には、其名つけ難きもの也。書籍は慥に本體ある故に書籍といふ名をつけたり、硯は慥に本體ある故に硯といふ名をつけたり、鎧と名づけ、甲と名づくることも又々斯の如く、一切草木禽獸に到る迄慥に各々本體ある故に各々その名具足せり。風といふものあり、目にも見えず、手にも取られざれ共枯木を吹倒し人家を覆へして慥に音相を具す、よつて風といふ名をつけたり。影といふものあり、鏡にうつる影、人の影、その餘の一切の影、手にもとられずなしといはんも宜べなれ共慥に色相を具す、よつて影といふ名をつけたり。世間一切の物、音相もなく色相もなく行相もなく、すべて形體なき物にはその名つけ難きもの也。唯何もなき所をば空とより

外は名づけ難し。佛法若し何もなき物ならば空といふべし。然るに往古より佛法佛道と呼んで人口に鳴動す、佛法豈に本體なからんや。士低頭して云ふ、我迷ふこと甚し、願くば佛法の眞旨を開かん、徴細に慈示し玉へ。老僧曰く夫れ佛法といふこと別の事に非ず、惟今手を動し口を開くことこれ何の道理ぞ、是れ人々具足佛法の妙用也。此の一心の名を佛法と名づけ、佛道と名づけたり、此を佛道は元來何もなき事といはんや。若し元來何もなきことならば、卽今の手を動し、足を働す底、これ何物ぞ。佛法とは我が一心の名といふことを知らずして却て佛法をそしりにくむは直に我一心をそしりにくむに當る也、これ大愚に非ずや、大文盲に非ずや、士が學ぶ所の書籍は是れ何等の書籍ぞ、天地の間あらゆる書籍は或は儒書か或は神書か、或は佛書か、或は道書か、或は歌書か、或は軍書か、或は醫書か、何れも皆身と心との二を說けり、畢竟此の何をか學問するや。身と心とを離れて外に書籍ありといはゞ邪書なり、外道の書也。士云ふ、某多罪、今日始めて此の如きの妙理を承はる、今より舊見を翻へし、願くば師の誨をうけんと云つて禮をなすこと再三也。老僧此の士の宅に滯留せしこと三十餘日此の士後に大工夫者となれり。

十五　大疑工夫を示す事

師ある時衆に示して曰く、工夫疑團は、百萬騎の大敵を唯一人にて拄へる如くにすべし。聞く主を疑ふ者は聞く主何物ぞと大疑團を起して深く工夫し、趙州の無を工夫せんも亦此の如く深く疑ひて居る、その中より色々の分別妄想起らば是は妄想の大敵に味方の工夫の城郭を奪取らるゝと心得て愈疑深く疑ふべし。大疑の一念を寶劒として、妄想の大敵少しも出來らば直に聞く主何物ぞと斬りすつべし。此の如く行住座臥共に修せば、太平の日極めて有るべし。老僧此の如く千變萬化垂語すと雖もただ是れ人をして深く心性を悟らしめん爲ばかりの言也、記憶しておくこと勿れ。

十六　淨心妄心を示す事

師一日示して曰く、人々具足して二種の心あり、工夫修行の人、必ず聞かずんばある可らず、人々二種の心あることを知識より能く〳〵聞かざれば動もすれば工夫に退屈して生死の大事を遂ぐること能はざるもの也。此の故に如來を始め、千里を遠しとせず善知識を尋ねよと說き玉ふ、百里二百里すら法の爲に歩を運ぶこと、大親切にあらずんば能はず、況や千里を遠しとせざることをや、誠に深き旨あるかな。二種の心といふは所謂淨心と妄心と也。妄心といふは、分別妄想の心念也。淨心といふは、分別妄想の起源也、これ卽ち淨心佛性也。淨心妄心、元來同一にして又二也。例へば燈と光との

如し、燈の本體ある故に自ら光あり、淨心佛性の本體ある故に、分別妄想の妄心あり、淨心は本體、妄心は用也。往々平日の人は妄想分別の心をおさへて、これ我が誠の一心也と思へり。是によりて工夫の人動もすれば此の樣なる惡念妄念多き淺間しき一心にては、佛菩薩などの如く悟ることはなるまじと思へり。此れより工夫にも退屈し、我は凡夫なりと云うて、惜いかな中途にして一大事を廢することを。或は分別妄想の心をおさへて、これ我が本心なりと思ふ故に、人十人あれば、一心も十色ありと思ひ、百人は一心も亦百色あるやうに思ふこと大なる謬也。淨心佛性は天地も未だ開けざる以前より今に到る迄移り變る色もなく昔の釋尊諸佛にも今の凡夫衆生にも草木禽獸にもこきうすきの差別もなく一面におし通せり。心經に生せず滅せず增さず、減せずと說き玉ふは此の淨心佛性のこと也。工夫修行は妄心の分別の心を以て專ら工夫疑團して淨心佛性を明らめ悟ること也。能く〳〵得心あるべし。

十七　悟に古今の別なきことを示す事

僧來參問て曰く、たとひ今時十分悟了したりとも釋尊の見處には遙に及ぶまじ、仔細は如來は八千度往來し玉ひて、諸餘の行法修を盡して圓覺果滿なれば也。師の曰く、此の事は知解情慮。諸經論錄の上を以て、全くはかり及び難き所なり、大德直に大疑團を起し實參實悟して分明に自知すべし。設ひ老僧辯懸河の如くにして、古今一點も差別なきことを論ずる共、益〻疑心多からん。見ずや臨濟禪師の曰く、山僧が見處に約せば釋迦と別ならずと云々。大德、臨濟の餘流ならずや、祖師は妄語し玉ふや否や。恥を祖門にあくること勿れと、師詰問すること三四回。僧たゞ默坐するのみ。師の曰く、これらの祖語、千遍百回眼に遮ると雖も自己の受用をなさゞることは信不及なるが爲也。是故に如來經中に末世の衆生誤あらんことを畏れて、法に古今の二法なく、悟に佛衆生の隔なきことを喩を以て說き玉ふ。其の喩に曰く先づ一挺の蠟燭に火をとぼし、その跡より蠟燭十挺二十挺を以てその火をうつし、此の如く展轉して、百挺二百挺乃至二千挺或は一萬挺、此の如く始め一挺の蠟燭の火をわかち移すに終りの萬挺の火に到ても、始め一挺の火と毛頭もこきうすきの差別もなく、始め一挺の火は甚あつく終の萬挺の火は少しあつしといふ差別なきを以て、自性を悟ることも又々此の如しと、釋尊說き玉ふ大悲心に非ずや。こゝを以て知るべし、實悟なる時は釋尊の悟と今時と全く差別なきことを。すべて諸經は經義とて義を以て述べ玉ふ。經中種々の奇怪の事多しと雖。皆一心佛性のことのみを、彼になぞらへ是になぞらへて說き玉ふ。看經の眼なくんば、惑多からん。かるが故に文の如く義を解せば三世の諸佛の仇なりと呵責し玉へり。如來八千度往來は、たゞ大數をあげ玉ふ、何ぞ啻に八千度

のみに限らんや。或は世上の觀音の再來、文珠の化身也といへることあり。天地一切の人、一切の物、再來にあらざるは一箇もなし。老僧かくいふと雖も、いよ〳〵孤疑をまさん、實に實悟見性して自ら知るべし。元來大道修力をたのむ物にあらず。

十八　拔隊法語の初行を示す事

師一日、示して曰く、拔隊法語の初の行に曰く、輪廻の苦を免れんと思はゞ直に成佛の道を知るべし、成佛の道とは自心を悟る是也と云々。此の一行成佛の捷徑、如來四十九年の要、最上乘の直說也三世諸佛の應現も是が爲也。無邊衆生の願欲も是が爲也、輪廻とは譬喩の言にして車の輪のめくること也。何を輪廻の苦といへば、世間貴賤貧福、老若男女の人々、平日十二時中、この心の一が善につけても惡につけても車の輪のめぐる如く、めぐり苦むこと也。身上のよき人は、よきにつけて此の心がめぐり苦み、身上の惡き人は惡きにつけてめぐり苦み 老人は年のよりたるにつけてめぐり苦み若き人は若きにつけてめぐり苦み、女人は女人一道につけて此の心がめぐり苦み、商人の賣買につけてめぐり苦み、百姓は耕作につけてめぐり苦み、高位は高位につけて此の心がめぐり苦み、下賤は下賤なるにつけてめぐり苦む也。この事終れば彼の事來り、喜去れば悲來りて、一年一月の中といへども一日も安穩といふこともなく、此の心一つが八方十方へくるり〳〵と車の輪のめぐるが如く萬事につけてめぐり苦む也。此のめぐり苦む心を指して、法華經に三界は安きことなし猶火の宅の如しと說き玉ふ。此のめぐり苦む心をそのまゝ來世に持てゆく時は直に惡道地獄と轉じかはりて、今の百倍の苦あり、外より得る地獄にあらず、人々手作の地獄なり。すべて今生來世の苦をおし集めて輪廻の苦とはいふ也。此の輪廻の苦を免れて、大安樂の處に到らんと思はゞ直ちに成佛の道を知るべしと也。直にといふは緩々たることにあらず、惟今眞直に直に成佛の道を知るべしと也。直にといふは死しての後のことにあらず、惟今生きて居る間のこと也。成佛の道とは佛になる道といふこと也。大半世間の人は、今生にて後世といふものを能く願ふ時は、死しての後にどこともなく、佛といふものになるやうに推量して、然かも確に成不成のわけも知らず、愚なること甚し。誠の成佛を遂ぐるといふことは、惟今直に一心を悟りて、不生不滅の全體に能く到りたる所をいふ也。此の如く能く到りたる人を、佛とも大菩薩とも名づけたり、佛道の本法極意は皆此の如し、なか〳〵とほ〳〵しきことに非ず。自心を悟るとは自分の一心を悟るといふことなり、悟といふこと格別のことに非ず、たゞ一心を明らむこと也。悟と明らむるとは元來同じ言也。世間の人は悟といへば佛菩薩の再來などばかりなる様に心得て常の人は至てなり難きやうに思ふこと大なる謬也、明らむるといへば、誰もなり易きやう

に心得て、私は斯の樣にあきらめたり、彼の人は明らめのよき人なりと、平日の言にはいへり。元來悟とは明らむることをいふ也。隨分工夫信心して、自分の一心を明らめたる所を悟といへり。この一心を悟る工夫信心は末世の迷の凡夫のみなすべき信心修行なり。佛菩薩は悟によつて佛菩薩の名を得玉へり。佛菩薩の再來などばかり悟といふは甚だ謬也。此の故に諸經の中に末世の爲に說くとの玉へり。能く〳〵此の道理をわきまへて、平日油斷なく心地修行して、速に成佛を得べし。惟今にも臨終に及ばゞ何事を以てか其の時の苦にあつべきや、渴にのぞみて井を掘ること勿れ。

十九　分別妄想の辨別を示す事

一士來參問て曰く、前日より和尙の慈示を蒙りて、工夫をなすと雖も、分別妄想愈〻盛なるが如し。この妄想分別つきずんば、一心を悟ることなるまじ、猶又垂語を玉へ。師の曰く、元來この工夫修行は妄想分別を拂ひつくす爲の修行にも非ず、心氣をしづむる爲の修行にもあらず、只念の起るにも氣の靜まるにも構はず、只深く工夫して、一心を悟る爲の修行なり。分別を拂ひのぞき、氣をしづむることは小乘或は外道仙人などの修行也。紫朱黑白よく〳〵分つべし。釋尊經中にこれらのことを譬喩を引て說き玉ふ。その喩に曰く、山岳深き處に一の岩窟あり、人跡不到にしてこの岩窟甚だ暗し。二人の男あり、この處に到る。一人の男、箒を以て岩窟の中の暗物を拂ひのぞかんとして力を盡せども暗物更に除かず、愈〻力を竭して日々拂ふと雖も更につくると能はず。彼の一人の男火をともして岩窟の中に入る、右の暗物忽ち打うせて、明なること晝の如し。火を燃して入ると暗きものはつくると も見えず、忽ちうせたり。人々一心を悟ることも又々此の如し。一心を悟るときは妄想分別の打うすること、岩窟に火を燃し入ると暗物忽ちつきはつるが如し。釋尊、火を燃して入る所を一心を悟りたる所にたとへ、箒を以て暗物を拂ふを妄想分別をはらひのぞくに喩へ玉ふ。人の心は昔も今も一同也火を燃して入るが肝要なり。暗きを拂ひのぞくは愚人也。

二十　近侍の僧に示す事

師の近侍の僧、しばらく遊方して他の一寺の長老に相見す。長老問うて曰く、澤水老師、平日如何が衆に垂語すや。僧の曰く、老漢、平日萬事を放下し、諸緣を忘却して大疑を起し、佛祖の如く直に自性を悟るべしと也。長老云ふ、澤水老師の示す所大に謬也。僧の曰く、先德皆以て此の如し、澤水老師の誤何れの所にかある。長老云ふ、見ずや、六祖大師の曰く、本來無一物、何度惹塵埃本來無一物の所に强ひて疑團工夫をなしてこの何物をか悟らむ、若し實に悟るべき物あらば六祖大師何ぞ本

來無一物といはん。こゝを以て知るべし、澤水老師人をして誑惑せしむることを。僧忿懥して言をつくせどもかなはず、十有餘日を經て歸庵し、卽ち師に一々前事を呈す。師叱して曰く、汝平日不信是般のことを以て他の長老に屈慢せらる、何ぞ檀經中の大師の語を以て驀直に他をいひつくし、空見の者をして正見となさゞるや。僧の云ふ、檀經の中、無一物を破却する底の語も亦ありや否や。師の曰く歷々としてあり。汝幼歲より眼に見、口に誦すと雖も恁麼の敗闕、信不及の致す所也。見ずや、六祖大師、衆に示して曰く、我に一物あり、頭なく、尾なく名もなく字もなし、諸人還て知るや否やと。僧駭然として罪を悔ゆ。師の曰く、これを無一物と云はんか、有一物と云はんか、若し實に無一物ならば大師何ぞ我に一物ありといはん。こゝを以て知るべし、文の如く意を解せば實に三世諸佛の寃なることを。僧これより深く工夫に入る。

廿一　文字の事、山居の可否を示す事

ある時、僧來參、呈して云ふ、某元來修道の志ありしに、不幸にして吾師はやく化す、よつて素志を遂げず、惟今住職の身なれば、文字書籍等も取扱はねば寺役なり難く山居の志あれども當時のことにかなはず、兎角日用文字言句、修道の障ならんか。師の曰く、此の一心佛性は文字言句などに惑はされ縛せらるゝやうなる物に非ず、文字言句は遙の後に人の分別才覺を以て作り出したる物なり。此の人々の一心は、人の作り出したる物にあらず、天地未分の以前より、自ら明々として今に到る迄かはる色もなく、十方世界に徧滿せり。平日深く工夫して一心を明らめ、天地と我と一體の所に到りたるを成佛作祖の田地とす、釋尊諸祖の本說は皆此の如し。隨分寺役をつとむる中より深く工夫あるべし兎角文字言句を忘れはつる程に工夫あるべし。山居の事畢竟無益なり、此の一心、所により境によりて改るものに非ず、いかほど山中の靜所に居るといへども、元の散亂の心を伴ひてゆく故に、靜所いよ〳〵散亂す。六祖大師曰く、道由心悟、豈在坐也。この一心坐にもよらず、住所にもよらず、いづくにあらんも、唯親切に工夫をなすべし、所により境によりて悟ることに非ず、唯工夫によるべし。

廿二　戒行を示す事

一士來參問うて曰く、和尙の慈示をうけてより、信心怠惰なしと雖も、この頃思ふに、五戒なり共保持せずんば畢竟工夫も無益たらんか、若し又五戒を保つ時は、人世の交會に差支もあらんか、この義如何致すべきや。師の曰く、此の工夫修行は佛道の本法、成佛の捷路にして欠くせばきことに非ず老僧平日示す如く聞く主何物ぞと、間斷なく路をゆく時も工夫し、家にある時も働く時も寢ても醒め

ても深く工夫をなすべし。讀むこと書くこと算用の時は工夫なし難し、右の用事終らん時は直に又本の如く工夫をなすべし。日々此の如くなる時は五戒十戒は物の數にあらず、平日定共戒にして、萬法戒を保つに當る也。戒といふは、これ心戒也。大唐徑山寺の額に書して云ふ、百千佛を建立せんより一句自然を悟るべし、無量の戒行を保つより、心の一戒を保つべしと也。若又老僧の示す如くに工夫をなさずして萬法戒を保つといはゞこの理あることなし。士又問うて云ふ、時々渡世のことにつき、分別をいたすことあり、工夫の障ならんか。師の曰く、公用内用或は渡世のことには、分別を用ひて隨分方々樣子よく取計ひ萬の事、平生の人に少しも變ることなきやうに心得て、少しも人を侮らず專ら兩親を大切にし、主人あらん人は、主君のことを我身のことを計らふ如くにして高位をば幾重にも敬ひ、下賤をば隨分あはれむで、さて平日無岔の分別了簡をば打すて、この工夫信心に取かへ、愈々深く工夫あるべし。士喜びて退く。

廿三　釋尊在世の誘導を示す事

師ある時衆に示して曰く、三千年に一度開く曇華には逢ふと雖、この大乘正法を開くこと至て難きこと也。如來四十九年の間、偏圓半滿の說、權實頓禪の敎、衆生の機に順うて、法門萬種にわかると雖、菩薩諸祖の論錄、病に應じて藥方無量ありと雖も唯今日人々の自性を悟らしめん一の大悲也。佛祖聖賢の洪恩各々忘る可らず、むかし靈鷲山會上、釋尊在世し玉ふ時は僧俗を分たず、信者を分類別局して導き玉ふと聞く、その理銳にして直に自性を悟る工夫信に心入る者をばその類を集めて一所に修行をなさしめ玉ふ。以下中乘及び小乘の類をば又一所に集めて修行をなさしめたり。或は名號を唱へ、書寫誦經を好む信者をば又その類を一所にして信心なさしめ玉ふ。此の如く一切を捨て玉はず、利生廣大なり。さて釋尊、信者の時節熟否を勸辯し玉うて、中下の信者及び名號書寫等の信者にの玉ふには、汝信ずること久し、今の修行より外に有難き修行あり、汝又これをなさんや否や。信者のいふ、是より外に一重よき信心あらで、世尊何ぞ先年より其の修行を導き玉はざるや。世尊のたまはく汝先年は剛氣猛情にして、なか〱合點あることに非ず、年久しく書寫或は名號を修行したる德ありて今日汝此の如し。信者いふ、この外に一重よき修行のあらば速に敎へ玉へ。世尊のたまはく、今猶早からんと、此の如く三回四回斟酌し玉うてその後、心地工夫に入れしめ玉ふ。その餘の信者をも此の如く導き玉ふと也。然るに近時は理のよく直に一心を悟る修行に入るべき人にも、名號題目或は誦經理のあしき信者にも年久しき信者にも、題目名號或は書寫、一朱階梯方便のうちにのみ留置せしめて這箇の玄旨を埋却す、悲むべし惜むべし。例へば醫師ありて、風氣にも敗毒散を與へ、中寒中暑に

も敗毒散を與へ、その外氣血痰むし腹にも敗毒散を與ふといはゞ、この理あることなし。釋尊諸祖の本懐、豈に此の如くならんや。若又右の道理を能く〳〵心得て信心せば百川おのづから大海となる如く、枝葉各〻根株に歸するが如くにして、一切を攝取して捨てず、誠に利生廣大なるものなり。

廿四　學文の次第を示す事

一僧相見、問うて曰く、和尙平日僧徒の學問せしことを嫌ひ玉ふと承る、實なりや否や。師の曰く老僧元來大好學也、何ぞ學問を嫌はん。僧のいふ、恁麼ならば、僧徒にいづれの書籍をか學せしむや師の曰く、世間一切の書籍を一々學せしむ。僧いふ、一切の書籍甚だ多し、恐らくは妄語し玉ふか。師の曰く、何ぞ妄語せん、夫れ世間一切の書籍は儒書か神書か、佛書か、莊老の書か、軍書か、醫書か、歌書か、此等の書各〻身のもちやう心の治めやうのみを說けり、老僧平日この書物等に少しもそむかず、何れも皆用ゆ、何ぞ此を學問を嫌ふといはんや。大德云ふ所の學問は何れの學問ぞや、平日眼に視、口に誦すと雖、その書の敎の如く學せざれば、學問といふにあらず、學問といふは、書を見てもその書の敎に少しもそむかず、身の持ちやう、心の治めやうを學ぶを學問といへり。若又身心の外に書籍あらば學ぶに足らず。經に曰く、法なほ捨つべし、況や非法をやと。その實參實悟に到ては法すら捨つべしと云へり、況や非法に於てをや、思ふべし、愼むべし。

廿五　絕學の次第を示す事

僧來參、呈して曰く某五六年間筆硯を手に取らず、書卷をも手にとらず、絕學にいたし、平日工夫のみ致すと雖、未だ大事究明の日に到らず、願くは開示し玉へ。師の曰く、工夫は只疑深くして他途にわたらず、一公案を提撕ある時は了悟の日極めてあること也。了期なきことは只工夫の疑よわき故也。大疑の二字、千語萬句の要也。さて惟今絕學といはれしこと大なる訛也。絕學とは悟了底の人のこと也。眞覺大師證道歌に曰く、絕學無爲閑道人と。筆硯を手にとらず、書籍一卷をも手に取らず、工夫修行一遍の人をば學人といへり、絕學とはいはじ。臨濟和尙を始め、修行底の人を學人と呼び玉ふ。一言半句と雖、誤なきこと肝要なり。

廿六　儒釋道の次第を示す事

一僧問て曰く、儒釋道といひ、儒佛神といへり、この三道四道一致と承る、然る時は釋尊、孔子、老子、天照大神、この四見所、此も千斤、彼も千斤にして少しも輕重なきや否や。師の曰く佛祖聖賢及

び諸道諸傳燈等、各々途を異にし轍を同うすと雖、若又權衡を以てせば悉く輕重淺深なくんばある可らず。僧いふ、何れをか輕とし、何れをか重とせん。師の曰く、門より入るものは家珍にあらず、大德平日前後左右を顧みず、純一無雜に工夫をなすべし、生死事大、無常迅速なり。見ずや臨濟禪師の曰く汝が久く住する所にあらずと。設ひ諸家の萬論を學得し去るも、無量の佛語聖意を聞取し得るも皆これ一夕の夢にして白骨近きにあり、念々頭燃を救ふが如くにして速に見性すべし、實に見性分明なる時は、佛祖聖賢諸傳燈、歷代諸祖の輕重淺深等、掌中の物を見る如く分明也。その時初めて知るべし、此は輕、此は重、此は淺、此は深、此は虛此は實といふことを。

廿七　白骨の大厄を示す事

一士來參問うて曰く、世上に廿五の厄或は四十二の厄といふことあり、實なりや否や。師の曰く二十五の厄或は四十二の厄は至て輕きことにて勝けて論ずるに足らず、人々一の大厄あり、士知るや否や、人々一の大厄といふは高位高官賢愚貧福を分たず、白骨の厄大厄なり。この白骨の大厄をば何を祈りてか免かるべき、愚なることの甚しき也士又問ていふ、神道に生れたるを穢とし死したるを穢とせしことあり、もし實に死を穢とせば、神を祭るに魚肉を獻ずること心得がたし、魚肉はもと畜生の死したる也、天照大神及び諸神人をさけて何ぞ畜生を愛し王ふや、神に於てあるまじき事也、願くは和尙の慈示を受けむ。師の曰く、天照大神の本志は、士の推量とたがふこと雲泥也、神者に生れたるを穢とし死したるを穢とせしこと甚だ深き道理あり、今士が爲に是を語らん、僣に聞くべし。元來この人々の身と心とに、毛頭も生滅の相もなく、去來の相もなし、然るに凡夫この道理を知らずして、生れたりと云うて喜び騷ぐと、聞きたうもない穢はし、本來死するといふ事もなき所に死したりと云うて嘆き悲むこと聞きたうもない穢はしといふこと也。天照大神の示は本來此の如し、世間その根源を知らずして、謬て神靈を侵し、浪に神者をうつこと、大なる過也。世間一切の事、その根元を見盡し聞き盡し知りつくさずんば、是非を論ずること勿れ。

廿八　學徒平日の用心を示す事

師一夕、徒衆に示して曰く、古人曰く參は實參なるべく、悟は實悟を要すと。毛頭も退屈の心を生ずること勿れ、個事は大海の如し、轉た入れば轉た深し、悟所邊際なく、達所窮りなし。天も自己佛性より涌出し、地も自己佛性より漏出し、日月及び草木國家山河も自己佛性より漏出したり。此の如く能く到りたる人を法王と名け、成佛の境界といへり、諸禪者、容易の念を起すこと勿れ。世間の技

藝、劍術手跡の指南すら、十年廿年の修學にては妙所を盡し難く、師道終り難し、況や佛道の大導師をや。例へば手習の如し、三年實に習ふ時は三年分の成功あり、十年習ふ時は十年分の成功具はれり、又々よき師を擇びてその上をつくす時はいか程の能書にも到ると也、又々その上を修する時は世上に見知る人なきにも到る。心地修行も亦復此の如し、幾度悟所ありとも、直に舊見を打すてゝ初心の時の心になり、もとの如くに大疑情を起して悉く修し盡すべし、性相一如となること至て難し。古人十年二十年或は身を終る迄粉骨碎身するは是が爲也。諸禪者、頭陀にめぐる時も、工夫一偏にして施者の男女の相、貧福の家をわかつこと勿れ、是又諸佛の規繩なり。諸禪者、平日心をつけて飲食の節を失ふこと勿れ、食は道の基本たり不時の物を食すること勿れ、多食飽食すること勿れ、願くは此の身勇壯のうち速に大事を窮明せんことを。住所は只その師を擇ぶべし、衣食をえらぶこと勿れ、工夫の時壁によること勿れ、四方を離れて正身に坐すべし。工夫に退屈せん時は、此の身かりにして老若互に白骨となることを觀ずべし。如來も經中に晝三度、夜三度白骨觀をなすべしと說き玉ふ。工夫は只公案を深く疑ふべし、深疑の二字、一切藏經及び百千の論錄、千句萬語の要也。工夫の時禪境あるもの也、或は人面、或は鬼形、或は佛形或は花形或は通身清淨、或は女形、或は通身なきが如きことあり此は工夫の疑ひよわき故也。工夫大親切なる時は禪境を愛する心なし。心に隙ある故に種々の障あり畏る可らず、貴ぶ可らず、この時は愈々深く疑ふべし。諸禪者、工夫に昏沈散の病あり、知らずんばある可らず、昏とは眠なり、散とは散亂なり、此の二種の病は誰人も知ると雖、沈病最知れ難し、工夫の人、十に八九は沈病をとめて殃を招くことあり、沈病とは眠にもあらず、散亂もなく妄想の念慮すべてつきたるやうにして、然かも慶快清淨にして久坐すれども勞せず、天地一たび平等の如くにして空にもあらず、寂にもあらず、有無是非にもあらずと思へり。工夫の人、此をとめて悟道と思ふ者あり甚だ畏るべし。こゝに住る時は、是より邪路におつ。この趣あらん時は一切を放下して愈々大疑を起すべし。諸禪者、昔も今も幽靈亡魂、狐火の說、或は神木古木より血を出し、或は古き石佛、石地藏の類或は化け或は夜行の說すべて取あぐること勿れ、又なすこと勿れ。天地の萬物一々佛性を具す、奇怪異珍なくんばある可らず。若その根元を知らんと思はゞ人々先づ自心を悟るべし。師、拂子を拈出して曰く這箇を見ても直に悟ること也。諸禪者還て會麼、元來大道修力をかるべからず、もし未だ會せずんば、歩を退けて大工夫をなすべし。

拾遺

一

ある時念佛誦經の信者、師の示を聞きて工夫修行に赴けり、信者ある時來て師に呈して曰く、先の日より和尙の慈示に隨うて工夫をなすと雖、動もすれば前日の念佛誦經におちて純一ならず、何れか眞の信心たるべきや、疑心甚だ多し、願くは又々開示し玉へ。師の曰く、夫れ理の分明ならざるに當りては、二つ物どれと云ふにして考へ、是は理の重きと也、是は理の輕きと也として何事も理の輕きを捨てゝ重きに隨ひ、厚きを取て薄きをすつべし。此の如くならざれば何事によらず明人にはなり難し。釋尊經中に喩へ玉ふと、今汝が爲に語らん、至心に聞くべし、まづ二人の兄弟あり、或とき二人深き山中に入りて、そこばくの辛勞して薪をきり、二人各ゝ伐りたる薪を脊に負ひ來る、山を下ることわづかにして、道の邊に銅あること夥し、其の弟は是を見て右の薪を打すて銅を負ひ來る、兄はかく迄骨を折りて伐りたる薪を今更打すつるは惜しきこと哉、後に來りて銅を採るべしとて、終に銅を取らずして右の薪を負ひ歸る。又路八九町ほど下りて見れば、路中に銀子あること夥し、弟此を見るとしとしく右の銅を打すて、わが力に任せて銀子を負ひ來る、兄は又かく迄辛勞して採りたる薪を打すつるは惜きこと也とて、薪を負ひて銀子をとらず、又路一里ばかり過ぎて見れば、路邊に黃金あること夥し、弟これを見て直に右の銀子を打すて、脊も破る迄に黃金を負ひ歸る。兄は又もとの言をなして薪を負ひ、黃金を採らずして家に歸る。兄後に右の銅銀子黃金のありし所へ往きて見るに跡はてもなし、終に手を空しくして歸ると也。釋尊此の如くの大慈願、後人何を以てか是を報せん、人々今日たま〳〵大乘の本法を聞くと雖、智識の示の如く修せざれば、右の銅銀子黃金を採り得ず、只徒に薪を負ふ人に似たり。理の輕重に於て右の銀子黃金を採り得たる弟の如くすべし。樊噲も大行は細瑾を顧みずといへり、世間の大行を遂げんとする人すら、なほ此の如し。況や今日愚暗の凡夫、生ながら成佛を得ること、豈に大行にあらずや。然るに人の誹此の障この遠慮などにからめられ、千萬劫無量の大寶を失ふこと愚といはんも甚だおろか也。

二

師常に示して曰く、如來、遺敎經に說き玉ふ、汝等比丘、もし勤めて精進せば、事として難きものなし、この故に汝等まさに勤めて精進すべし。進む時は譬へば小水の常に流れて能く石を穿つが如し若くは行者の心しば〳〵壞廢すること譬へば火を鑽て未だ熱せずして息めば、火を得んと欲すと雖、火を得ること難きが如し此を精進と名づくと。又曰く、木中より火を取らんと欲する人、火の出るを限りとして退屈なく木をもむ時は火必ず出づ、若し中頃に退屈せば、如何ぞ火を得ることを得ん、工夫疑團も又々此の如し、能く〳〵思ぶべし。

三

師、常に示して曰く、諸大德を、常に飮食の節を失ふこと勿れ、身體を保育し生命を安全すること偏に飮食の二にあり、常に多食すること勿れ、能くその良毒を辨じて食すべしその當分は、その毒目に見えず、心に覺えずと雖も、終に病因となりて或は頓死、橫死の殃を招くことあり、常に好味麤食ともに多く食すること勿れ、食は飢をやめんが爲なり、衣は寒を防がんが爲也、是故に如來經中に汝等比丘諸々の飮食をうけては、まさに藥を服するが如くなるべし、好に於ても惡に於ても增減を生ずること勿れ、わづかに身を支ふることを得て、以て飢渴を除けと、又常に慚愧すべし、古人も白法を用いて無上の道を成就し玉ふと也、白法とは慚愧のこと也、我幸に無上道を開くと雖未だ成就せず、この身のかゝりなること實に空花に似たり、此の身はおしつけ白骨とならざるべし、此の如くの不信心さて是れ何事ぞやと、自ら誡め自ら鞭うちて、只常に聞く主の知れざる所を深く疑ふべし。拔隊和尙示して曰く、深く疑へといふも悟らせんが爲也と。大疑工夫の外一切の事、一切の業皆悉く枝葉なり。右の如く常に慚愧をなし、今日も明日も日々に進み、夜々に怠らずんば誠に至道無難ならん。

四

師一夕、示して曰く古今諸大德の法語語錄かず／＼ありと雖、その中至要なるは至て少し、隨分邪正を辨じ、是非を擇ぶべきこと也。或は和解に走るもあり、或は活達に走るもあり、或は殊勝におつるもあり、皆これ法の病也、よく／＼擇び用ゆべし。實に見性の釋尊諸佛に少しも違はざる時は、殊勝に見えて殊勝に非ず、活達に見えて活達に非ず、或は活僧と見え、或は殊勝と見え、此の如くの輩今人の智識と呼ばれたる中にも多し。然れ共見性なきには非ず、只眞實に修しつくさゞる故に、未だ大悟大徹には非ず、底を盡して修しつくさざるの誤也。かるが故に示にも又足らざる所あり、只だ示の足らざるのみにあらず、且又誤等所々に見えたり、能く／＼飲み恐るべし。只修行の人、大工夫による、工夫は只公案を深く疑ふべし。深く疑へといふは成佛の根本、佛學の至要なり。實に見性悟道する人は殊勝なるべき時は殊勝に、活達なるべき時は活達に、急ぐべき時に當ては急ぎ、ゆる／＼すべき時にはゆる／＼し、やはらかなるべき時は隨分やはらかにし、はげしうすべき時には悉く激しうし時に臨み物に應じて自由自在を得たり、豈に慮知才覺分別の及ぶ所ならんや、さるによりて鬼神も測ることなく、外道波旬も窺ふに路なく、佛眼も見ること能はず、況や凡夫の眼に奇妙なり、不思議なり、殊勝なり、活僧なりと見ゆるほどなるは皆是れ凡夫妄想のはたらき也。

五

師示して曰く、世上すべて淺きうは通りの有相信心の說のみにして、この大乘の正法を說く者聞く

者千萬人の中にも至て稀也。この故に如來の本懐この大乘本法を興隆せんに、大底のことにてはかなひ難し、むかし釋尊も一方の導師ともなるべき程の諸大菩薩にの玉ふは、汝等無佛國土に於て、わが此の正法を興さんに、必ず我慢邪惡の輩種々の障をばなさん、その時汝等如何すべきや。諸大菩薩等答へていふ、設ひ邪見我慢の輩種々惡口罵辱するとも、少しも瞋恚を起さず、少しも畏をなさず、一切の誹一切の寃、悉く堪忍すべし。如來の曰く、左樣の淺き心懸にては邪見無法の中にて、この大乘正法を興すこと、なか〳〵かなひ難し、邪見無法の輩、設ひ刀杖を以て打たゝき、或は毒藥を與へ、或は鼻をそぎ、目を抉り、腕を斷ち脛を折るとも、すきと見ぬ分、聞かぬ分にして心を大死人の如くにもちなして、すきと先きにいろふこと勿れ、もし此の如くならずんば、大法を起すこと能はず。又この無上道を輕々しく人に語り聞かすること勿れ、還て謗を起して甚だ法に害あり、愼むべし。又先より尋ね求めんに、毛頭ばかりも隱しおくこと勿れ。

六

師常に示して曰く、貴賤を分たず、賢愚を論ぜず、人々母の胎内に宿り鼻口眉目漸く全具して、十月を經て出生したり、鼻の樣子、眉毛の次第、口のつき樣、眼の體裁、千人百人といふと雖、少しもたがはず、さて〳〵奇妙の巧藝なり、これ畢竟何物かのわざなるぞや、此等のこと計りにても、了箇にも、分別才覺にも及ばざること也。これについても自心を悟らんとする志の起らざること、愚なるかな〳〵。さて又日月の運轉、夜があくると明に、日が暮ると暗く、さて〳〵何の道理やら、不思議奇妙の事、平日目前にあること也。只人々生れおちてより見なれ聞きなれて、只うか〳〵として氣が付かず、おしつけ人々白骨となり去ることをも辨へず、只日々の世渡にのみ一生を苦しめ、心を惱ましてあき足らず、その終には何程の樂あるかと思へば終には無間獄裡に墮在して更に出離のたよりなし憐むべし悲むべし。右の理少しも心中におかん人は拔隊法語能く〳〵披見あるべし。

七

ある時、歸依の信者師に呈して曰く、先の日禪要に志ある人ともに語らんとせしによつて、某一二と語る。某曰く、この身は限あり、必ず變滅す。この心は不生不滅にして終に變易なし。例へば出火の時屋は燒滅すれ共、主人は走り出るが如し、此の身滅する時魂は外へ走り去るべしと。師聞きて大に呵して曰く、甚だ誤れり、これ外道の惡見也。むかし大慧和尚、一日ある居士の宅に過ぎる。居士、壁間に白骨の形を描き、その傍に書して曰く、尸は這裡にあり、その人いづくにかある、乃ち知る一靈皮袋に居せさることをと。大慧和尚見て大に呵して云ふ、この偈は汝が作れるものか、これ卽ち外道の惡見也、汝誤れりとて卽ち改め點して曰く卽此形骸。便是其人。一靈皮袋。皮袋一靈と。こ

こを以て知るべし、今又汝も誤れることを。元來この身にも少しも生滅の沙汰なし、たゞ是れ信不及なるが故に種々の妄念やむことなし。今日より志を改め、底をつくして修錬あるべし、必ず老僧が言を錯て聞き、或は世智の賢きに奪はれて萬劫の殃を招くこと勿れ。拔隊の曰く、實か虚言か急に眼をつけて見よと、實に此の如し。直に實悟見性して始めて知るべし、老僧に歸依すること、設ひ日々に百千の黄金を供養するも又々その親切實頭なること、老僧が二便をなむる程なるも、實に大疑工夫に赴かざれば眞の歸依にあらず。設ひ又右の親切に十倍する人なるとも、大疑工夫にあらずんば、何を以てか此の一心佛性を語ることを得ん。光陰惜むべし、時、人を待たず。

八

師ある時示して曰く、この大乘直示の法を明らめんに工夫修行に退屈すること勿れ。この故に如來、經中に喩を引て說き玉ふは、大富饒の人あり、此人ある時年久しく心おきなくなれ交りたる男にいふ樣は、我今汝に大金を與ふべし、汝が外の業をなさず、心易く一生を渡る程の大金なり、今汝が家の內におけり、汝尋ね求めて用ゆべし。彼の金子を得たる男は、わが家の中を尋ねるに右の金子見えず、種々心を廻らし尋ぬる程に、戸棚つり棚は云ふに及ばず、鍋釜桶櫃のうち迄尋ぬれ共更に見えず。この男思へらく、彼の人は年來われと睦しく殊に他にすぐれて懇なり、決定して僞はあるまじ。され共見えざるは不思議なり。此は我が尋ねやうの淺く愚なる故ならんとて、愈〻心を碎き、二階梁の上、椽の隅までを尋ねたり、され共右の金子更に見えず。又々思ふ樣、僣にあることはあらんとて、板をはね壁を倒し、柱をわり屋根をくづして尋ねたり。され共右の金子更に見えず。又々思ふ樣は、かく迄尋ぬるに見えず、此は定めて彼の人われに戯れて、我をすかすならんと暫く分別して、又思ふ樣は、彼の人はもと眞實にして、僞ある人に非ず、決定して金子を尋ね出すべしとて、大肌をぬぎ鋤鍬などを以て家の下の土を掘る、地を掘ること五六尺なれ共、右の金子更に見えず、され共あることは必定ならんと心得て、地を掘るほどに、大汗を流し、地の底へ四五丈ばかりも深く掘りたれば、果して右の金子へ掘り當てたりと。心地修行も亦復此の如し。今日も明日も明々日も退屈なく、悟らずんば愈〻精力を勵まし、心を改めて何處迄も深く工夫をなす時は百人は百人共に悟らざることある可らず、ただ自己の寶を得ざることは尋ねやうの淺く愚なる故也。然れ共又古人も示にも佛法に目をつくなといふことあり。素とより人々具足の佛法なれば、たのしき事ども也、能く〳〵修錬あるべし。

箇一小冊、澤水老師所レ與ニ求法緇白一之幻藥也。每レ聞筆ニ記其精要百分一。將レ欲レ便ニ未聞未了一。宜レ擬ニ遼豕一。通章唯貴レ採レ實無ニ遺漏一而已。伏冀覽人勿下惡ニ言重語拙一害中本志上。

近侍僧惠俊撰

時元五文載庚申二月中浣。

昔日梓に鏤といへ共尚又童蒙の一助となさんと、和田氏需に應じひらかなに寫し、拾遺少増補して重刊す。かな字の誤は、愚なる所にして、たゞ意旨の差ざるを本とせり。

時寶暦十三癸未秋季。　老杜多活明年七十敬書

澤水假名法語終

拔隊假名法語

初端　成佛の直路

輪廻の苦を免れんと思はゞ、直に成佛の道を知るべし。成佛の道とは自心を悟る是れなり。自心と云ふは父母も未だ生れず、わが身も未だなかりしさきよりして今日に至るまで移り變ることなくして一切衆生の本性なる故に、是れを本來の面目といへり、此の心もとより清淨にして此の身生るゝ時も生るゝ相もなく、此の身は滅すれ共死する相もなし。又男女の相にもあらず、善惡の色もなし、譬喩も及ばざる故に是れを佛性といへり。しかも萬の念此の自性の中より起ること大海より波のたつが如し、鏡に影のうつるに似たり。此の故に自心を悟らんと思はゞ、先づ念の起る源を見るべし。たゞ寢ても寤めても立居につけても自心これ何物ぞと深く疑ひて悟りたき望みの深きを、修行とも工夫とも志とも道心とも名けたり。又かやうに自心を疑ひて居たるを坐禪とは云へり。一日に千卷萬卷の經陀羅尼を讀みて千年萬年怠らざらんよりも一念自心を見るにしかず。左樣の有相の行はたゞ一旦福德の因縁となりて其の福つきぬれば又三惡道の苦を受く。一念の工夫は終には悟となる故に成佛の因縁なり。

たとひ十惡五逆の罪を造りたる者も一念翻して悟れば卽ち佛なり。さればとて悟るべきをたのみに罪を造るべきにあらず。自ら迷ひて惡道に落るをば佛も祖もたすくべきこともあらず、たとへば稚き者の父のそばに寢て夢の中に打擲されて、或は病に侵されて、苦を受くる時父母我を助けよと喚はれども夢みる心の中へは行くことなけば、父母も助け得ざるが如し。たとひ是れに藥を與へんとするとも、おどろかずんば受く可らず、自ら驚ろき得ば夢の中の苦を遁るゝこと他人の力をからず。自心卽ち佛なりと悟りぬれば忽ちに輪廻の苦を免るゝことも又かくの如し。若し佛の助くべきことならば何れの衆生をか一人も地獄に墮すべきや。此の理りの眞なること自ら悟らずんば知るべからず、抑も只今目に色を見、耳に聲をきゝ、手をあげ足を働かす主は是れ何物ぞと見るに、是は皆自心のわざとは心得たれども、正しくは何の道理とも知らず。是れをなしといれんとすれば用ゐるに隨つて自在なること明なり、有といはんとすれば其の形更に見えず、たゞ不思議なるばかりにて兎も角も心得やらるゝかたのなきまゝに了簡更にたえはてゝ如何ともせられざる是れよき工夫なり。かやうの時退屈の心なくして、愈〻志深くなりきはまる時、深き疑の念、底にとほりて破るゝ時自心の佛なること疑なくして、生死の厭ふべきもなく、法の求むべきもなし。虛空世界たゞわが一心なり。たとへば夢の中に外に迷ひ出て、わが故鄕へ歸るべき道を失ひて、或は人に問ひ、或は神に祈り、佛に祈れども未だ歸り得ざるものゝ、其の夢うち覺めぬればたゞわがもとのねやの中にあり。此の時自ら夢の中の旅より歸ることは、さむるより外に別の道はなかりけりと知るが如し、これを本に還るとも云ひ安樂世界に生るゝとも云へり、是れは少し修行の力を得たる會かたなり。坐禪をたしなみ、工夫をなす人は在家も出家も皆是れ程のしるしは有ることなり。是れもはや工夫をなさゞる人の知るべきにあらず。是れははや眞の悟なり、わが法に於て疑なしと思はゞ大なる誤なり。たゞ銅を見つけて金の望を止めんが如し、もしかやうの趣のあらん時は勇みをなして愈〻深く工夫をなすべき樣は、我が身を見るに幻の如く、水の泡、影の如し。自ら心を見るに虛空の如し、形もなし。此の中に耳に聲を聞き響を知る主は、さて是れ何物ぞと少しもゆるさずして深く疑ふばかりにして、更に知らるゝ理、一もなくなりはてゝ、我が身のあることを忘れはつる時、先の見解は斷えはてゝ疑十分になりぬれば悟の十分なること、桶の底の出づる時入りたる水の殘らざるが如し。朽はてたる木に忽ちに花の開けるが如し。若しかくの如くならば法に於て自在を得て大解脫の人なるべし。たとひかやうの悟あるともたゞ幾度も悟らるゝ悟をばうちすてゝ、悟る主に還り根本に歸りて、かたく守らば情識のつきるに隨ひて、自性の朗かになること玉の磨くに隨うて光をますが如くにして、終には必ず十方世界を照すべし、是れを疑ふべからず。若し志深からずんば今生にかやうに悟ることなくとも、工夫の中にて臨終したらん人は來生には

必ず安く悟らんことを昨日企てたることの今日はたやすく遣行くが如し。工夫坐禪の時念の起るをば厭ふべからず、愛すべからず。只その念の源の自心を見窮はむべきなり。心に浮び目に見ゆることをば皆是れ幻にして眞にあらずと知りて恐るべからず、貴ぶべからず、愛すべからず、厭ふべからず、心物に染むことなくして、虚空の如くならば臨終の時も天魔に侵さるゝことあるべからず。又工夫の時はかやうのこと、かやうの道理をば一も心中に置くことなくして、たゞ自心是れ何ぞとばかりなるべし。又只今一切の聲を聞く主は何物ぞと是れを悟らば、この心諸佛衆生の本源なり。觀音は聲に付て悟り玉ふが故に觀世音と號せり。只此の音を聞く底のもの何物ぞと、立居につけて是れを見、坐しても是れを見る時、聞く物も知られず、工夫も更に斷えはてゝ、茫々となる時、此の中にも音の聞かるゝとは斷えざる間、愈深く是れを見る時、茫々としたる相も盡きはてゝ、晴れたる空に一片の雲なきが如し。此の中には我といふべきものなし、聞く底の主も見えず、此の心十方の虚空と等しくして而も虚空と名くべき處もなし。是れ底のとき是れを悟と思ふなり。此の時又大に疑ふべし。此の中には誰か此の音をば聞くぞと、一念不生にして究めもてゆけば、虚空の如くにして一物もなしと知らるる處も斷えては更に味なくして暗の夜になる處について、退屈の心なくして、さて此の音を聞く底のもの是れ何物ぞと、力を盡して疑十分になりぬれば、疑大に破れて死はてたる者の蘇生するが如くなる時、則ち是れ悟なり。此の時初めて十方の諸佛、歷代の祖師に一時に相見すべし。若しかくの如くならんとき、是れを擧て見るべし。僧問二趙州(でうしう)一。如何是祖師西來意、答曰庭前柏樹子。是底の公案に少しも疑あらば打還て本の如く、音を聞く底のもの何物ぞと見るべし。今生に明らめずんば、いつの時ぞや、一度人身を失ひては三惡道の苦、永く免れんことあるべからず、誰がかくしたる悟ぞや。只自ら無道心なる故と思ひ知りて、猛く精彩をつくべし。

一　與二熊阪男一

病中の工夫用心の樣、書付ておこせと承り候。誰か是れ病中の人、誰か是れ工夫する者、自ら我を知るや。通身是佛性、通身是大道。道體もとより清淨にして、一切の相を離れたり、何の病かあるべき、是れ諸佛の本源、諸人の自心、本來の面目なり、是れ見聞覺知の主人公たり。是れを悟れば佛なり、是に迷へるは衆生なり。故に佛祖みな直に人心を指して性を見て成佛せしむ。たとへば影に惑へる者は形を見るにしかざるが如し。昔人ありて酒を飮むに、酒の中に蛇あると見ながらこれを飮む、則ち家に歸りて、腹の中に苦痛かぎりなし、種々の療治を加ふれども、效しなくして命終らんとす。此亭主是れを聞きて此の人を我が許へ喚びよせて、先の座において酒を與へて是れを藥なりと云ふ、此

の人飲まんとするに、酒の中の蛇さきの如し、亭主にこれを告ぐ、亭主座の上を指す、此の人見上てみれば、上に弓を掛けたり、其の時さきの蛇は此の弓の影なりと知りて二人目を見合せて、咲つて言葉なし、苦痛忽ちに止みて、則ち本の如し。見性成佛も亦かくの如し。永嘉の云く實相を證すれば人法もなし、刹那に滅却す阿鼻の業と。實相とは衆生の本源なり、自心是れ如來の大圓覺なることを信せずして、有相に執着して外に佛を求め法を求めて、種々の苦行をなして成佛せんとすれども人我情識止まざる故に三界に流轉して大苦を受く。われ蛇を飲みたると思ひて、若干の療治を加ふれども一も用に立たず、たゞ自ら根本を見て則ち除くが如し。故にたゞ自ら自心を見るべし、一法の人に與ふるなし。經に云く知レ幻卽離、不レ作ニ方便一。一切の諸相は皆是れ幻にして實なし。諸佛衆生なほ是れ水中の影像なり、影をとめて實とすること、本性を見ざる故なり。常に誤りて心念收まり空々寂々としたる處を認めて本來の面目なりと思ふことあり、又水中の影なり。唯了知の及ぶ所を通り過ぎて如何ともせられざる所について渠を見よ、かれは是れ誰ぞ兎角の杜枝を推し折り、火裡の氷を打碎きてはじめて親しく且く道へ、是れ何か親し、今日は八日、明日は十三。

二　與ニ神龍寺尼長老一

成佛の望あらん人は、佛になるべき主を知るべし。此の主を知らんと思はゞ只今の一念の下について尋ぬべし。一切の善惡を念ひ、色を見、聲を聞く者は何物ぞと、自ら深く疑ひば、必ず悟るなり。悟れば卽ち佛なり。佛の悟る悟は、一切衆生の一心なり。心體淨くして、一切の境界にそむくことなし。女人の身にある時も、女人の身にあらず。男の身にある時も、男の相にあらず。卑き身にある時も、卑き身にもあらず、尊き身にある時も尊き身にもなし。たとへば虛空の變る色もなきが如し。天地は壞るゝことありと雖、虛空は只色のみありて、更に形なし。十方世界の中皆虛空にして、遍からずと云ふことなし。一心も亦かくの如し、色身の生ずる時も一心の生ずることなし此の身は死する時も一心は死することなし。又形の見ゆべきことなしと雖、通身に充滿して目に色を見るも、耳に聲をきくも鼻に香をかぐも、口に物を言ふも、手を動かし足を働かすも一心の用にあらずと云ふことなし。此の心を離れて、外に向ひて佛を求め法を求むるを迷の衆生と名けたり。此の身は是れ佛なりと悟る人を佛と名けたり。此の故に自心を悟らずして成佛したる衆生なし、此の心は六道の衆生に各具足して、獨りも漏ることなし、猶ほ虛空の萬の處に充滿したるが如し、隔あることなし、佛に差別なしと云ふは、此のいはれなり。諸佛此の一心を悟りて衆生に示すに衆生鈍根にして有相に深く着して、此の有爲の法身、清淨の眞佛を信じ得ざる故に譬を以て說く時、此の心を如意寶珠と名け、ある時は大道と

名け、ある時は阿彌陀と名け、ある時は大通智勝佛と名け、或は地藏と名け、或は觀音と名け、或は普賢と名け、或は父母未生以前、本來面目と名く。六道の衆生の爲に六根の主たる故に地藏は六道の能化なりと云へり。一切の佛菩薩の名は一心の異名なり。自ら我が心佛を信ずれば一切の諸佛を信ずるに當るなり。此の故に經に云く、三界唯一心なり。心の外に別に法なし心と佛と及び衆生と、是の三差別なしと。又一切經は衆生の身上を指したる詞なる故に自ら一心を見る人は、一切經を一時に讀むにあたるなり。此の故に經に云く修多羅の敎は月を指す指の如し。修多羅の敎とは衆生の一心を指すを云へり。一心を以て內外を照して明らむるを、月の世界を照すと云へり。此の故に經を讀めば莫大の功德ありと云ふも、ただ此謂れを知らんが爲なり。又佛を供養すれば成佛すといふは心を悟るをいふなり。佛の名を唱へ、經を習讀むも唯悟の岸につかんが爲の舟筏なり、舟筏に乘りて、川を超えて岸に着きて後、舟筏を離れて急ぐべし。此の故に千日萬日經を讀みたらんよりも、一念一心を見たらん功德は限りなきまさりなり。又千年萬年この理を聞かんよりも、一念自心を見たらん功德は限りなきまさりなり。但し淺きより深きに入る故に、云ふ甲斐なき愚痴破戒の者の一心に經をよみ佛の名をも唱へんは初めて舟筏に乘らんとする者の如し、ありがたき結緣なり。若し只筏の中に滯りて悟の岸に着かんと思はずんば是れ大なる誤なり。釋尊は萬の難行苦行をなされしほどは終に成佛せず、六年萬事をなげすてゝ坐禪して心を悟り則ち正覺を成して一切衆生の爲に心法を說かれたるを一切經とは云へり。此の故に諸經は皆佛の悟の一心より出でたる辭なり。此の故に一心は、只今諸人の胸の中にあり、六根の主たり。是れを悟るとき、一切の罪業、一刹那に滅すること氷を湯に入るが如し。かやうに悟りて後自心是佛なりと云ふことを知るべし。心性本より明にして始終佛衆生の隔なしと雖、妄想の心念に隔てらるゝこと、雲の日月の光を隱すが如し。然れども工夫の力によつて、妄想の消ゆること、風の雲を拂ふが如し。妄想の念斷えぬれば佛性の顯はるゝこと雲消えて月彰はるゝが如し。只本の光彰はるゝなり。是れ初めて外より得るにあらず。此の故に生死輪廻の苦を免かれんと思はゞ情識を盡すべし。情識を盡さんと思はゞ心を悟るべし。心を悟らんと思はゞ坐禪をすべし。坐禪は工夫を宗とすべし。工夫と云ふは公案を深く疑ふべし。公案の根本は自心なり。心を悟りたき望の深きを志とも云ひ道心とも云ふなり。只地獄に墮ちんことを深く恐るゝを賢き人とは云ふなり。只佛道に志のなきも、地獄の哀しかるべきことを知らざる故なり。昔菩薩あり、女人在りし時、一切の音を觀じて悟を得る故に、世尊是れを名けて觀世音菩薩と云へり。今の人も卽心卽佛の體を知らんと思はゞ、只今物の音を聞く時に當りて此の音を聞く物は何物ぞと見れば、必ず我が身と觀音と別ならざることを悟るべし。此の心は有にもあらず無にもあらず、一切の相を離れて一切の相を離れず。念の起るをば

止めんともすべからず二念をも副ぐべからず。只念は起りもせよ、止みもせよ、念に違はずして只偏に自心是れ何ぞと疑ふべし。深く疑へといふも悟らせんが爲なり。知らぬを知らんとすれば心のめぐる道たえて、いかんともせられざる時を坐禪とはいふ也。坐をしてもかくの如く疑ひ、立居につけても寢ても寤めても只自心の悟らざることを念として底にとほりて疑ふを工夫とはいふ也。工夫一偏になりて疑の心底にとほる時、疑俄にやぶれて卽心卽佛の正體の彰はるゝこと、箱やぶれて鏡の隱るゝ所なきが如し。十方世界を照して十方世界に迹なし、此の時始めて六道輪廻の道斷えて、罪障消滅す。此の時の心の中の樂、辭を以て述べがたし。例へば夢の中に地獄に墮ちて獄卒にさひなまるゝと見て、苦限りなき時その夢に覺めて、一切の苦一も殘らざるが如し、此の時生死を脫くると云ふなり。かやうに悟らんこと人によるべからず、只志によるべし。佛と衆生とは水と氷との如し、氷にてあるときは、石瓦の如くにして自在ならず、解くれば本の水にて、緣に隨ひ滯ることなし。迷ふ時は氷の如し、悟れば本の妙體なり、氷の中に水とならざる氷なし。是れを以て知るべし、一切衆生と佛と隔なきことを。只迷の一念を隔とするのみなり、迷の一念解けぬれば衆生則佛なり。ゆめ〳〵退屈の心を起すことなかるべし。縱ひ志淺くんば今生れ悟らずとも工夫をたしなむこと念々怠らずして志の中にて臨終したらば來生には必ず生れながらに悟るべし。今日仕かけたることの次の日は安く道行くが如し。さればとて油斷あるべからず、只今臨終に及ばゝ、何事か用に立つべき、只罪業の身にそひて、地獄とならんをば如何せん。幸に解脫の大道あり、先の若干の辭は皆枝葉なり。只此の一句を胸にあてゝ見るべし。如何か是れ自心の佛、一切の諸佛の體を一目に見んと思はゞ、只我一心の姿を悟るべし、實かそらごとか、急に眼を着けて看よ、如何か是れ自心の佛、若しよく心を悟らば火中に蓮華開けて萬劫を經るとも凋まじ。諸人本より蓮華の中にありながら、何としてか知らざる。

三　示ニ中村安藝守一

應無所住而生其心の一句に付て、いかゞ修行すべき由承り候。覺道別に用心なし、只直に自性を見て、他途にわたらざれば心華發明す。故に經に云く、住る所なくして其の心を生ずべしと。佛祖の直に示す千句萬句、只此の一句なり。其の心といつぱ一切の相を離れたる本性なり。性卽道、道卽佛、佛卽心なり。此の心內にあらず、外にあらず、中間にあらず、非レ有非レ無、非ニ非有一非ニ非無一非レ心非レ佛非レ物。故に所住なき心と云へり。此の心は卽ち眼にありては色を見、耳にありては聲を聞く、只此の主を直に究むべし。古人の曰く、四大の色身、說法聽法を解せず、脾胃肝膽說法聽法を解せず、虛空說法聽法を解せず。是れなにか說法聽法を解するぞと、此の如くに直に眼をつくべし、見る處に於て

心若し一相にも住し、一味にも着して、道理義理にもわたらば、天地遙に隔たる。如何か用心して直に生死を截斷せん、進めば理に迷ひ退けば宗に背く、進まず退かざれば機ある死人、直に心絕して、やる方なき工夫をして、間斷なくんば、必ず開悟して、應無所住而生其心なるべし。然らば即ち一切の言句公案、乃至百千の法門、無量の妙義、一時に明らむべし。龐居士、馬祖に問ふ、萬法と侶たらざる、是れ何人ぞ。馬祖云く、一口に西江水を吸盡くさんをまつて汝に向つて言はん。居士即ち言下に大悟す。看よ、是れ何の道理ぞ。是れ應無所住而生其心か、是れ聽法底か、若し猶未だ會せずんば即ち今聲を聞く底、是れ何物ぞ、急に眼を着けて看よ、生死事大、無常迅速なり。光陰惜むべし、時人を待たず。

自心本より佛なり。是れを悟るを成佛と云ひ、是れに迷ふを衆生と云ふ。寢ても寤めても立居につけても、自心是れ何物ぞと、自ら我が念の起る源について見るべし、抑もかやうに物を知られ思はれ此の身を動し、働かし、進退する主は、さて是れ何物ぞと、只是れを自ら悟らんと志して、不斷に心に提げて忘るゝことなくば、縱ひ今生に悟らずと云ふとも、是れを緣として來生には必ずたやすく悟らんこと疑ふべからず。坐禪せんと思はん時は、一切の善惡一も思ひはかることなかれ、又念の起るをも止めんとすることなかれ。只先づ直に自心是れ何ぞと疑ふべし。かやうに深く疑へども、知らるる方なくしていかんともせられぬまゝ、心の道たえはてゝ、我が身の中に我と云ふべき物もなく、心と名くべき形もなしと知る物は、さて何物ぞと、我にかへりてよく〳〵見れば、なしと知る心も打失せて、何の道理もなきこと虛空の如くなれども、虛空の如くなりと知る心底をつくして絕えはつる時自心の外に佛なく、佛の外に心なきことを悟るべし。此の時始めて知るべし。耳に聞く所なき時眞の聽聞なり、目に見る所なき時三世の諸佛に相看することを。但しかやうに書付たる辭のまゝに心得ておく可らず、唯自ら悟るべし、看よ〳〵自心是れ何物ぞ。あなかしく。

人々本源の性は、本自ら佛なりと雖、自ら是を信ぜずして心の外に佛を求め法を求むる故に、悟らずして善惡の業緣にひかされて輪廻生死を免れず。諸の業の根本は識情なり、識情忘すれば解脫の人なり。彼の識情は自性を悟れば寂滅すること塵の中に埋れたる火を吹きたつれば、火は現はれて塵は滅するが如し、坐禪の時、念の起るをば、あながちに厭ふことなかれ、又好くことなかれ。只其の念をあとにかへし、起る源を見て動ぜざれば、一切の念の根本の情識の滅すること、猶火の中の塵を盡すには、火を煽ぐより外のてだてなきが如し。又妄想盡きて胸中に一物なく、內外隔なきこと晴れたる虛空の如くにして十方淸淨なるも、悟にあらず。若し是れを認めて佛性を明らめたると思はゞ、只光影を見て正體とせんが如し。若しかくの如くならん時は愈〻猛く精彩をつけて一切の音をきく底の自

心を見きはむべし。抑も四大の色身は、幻の如くして實體にあらず。此の色身の外には、心とも名づくべき物なし。十方の虚空、又色を見、聲を聞くべからず。此の中に一切の聲を聞き、響を知る物は是れ何ぞ、さて是れ何物ぞと、自ら大に疑團起り是非分別の機盡き、有無の見忘すること、暗き夜に火を打消したる如にして、我あることを知らずと雖も、一切の聲の聞かるゝ時、我あることを覺ゆ。只爰に付て、卽今此の聲を聞く物を知らんとすれども知るゝ處なくして、いよ〳〵心の行方、十分につまりはつる時、忽然として大悟すること、死人の手を打て高聲に笑ふが如し。此の時始めて自心是佛なりと云ふことを知るべし。さてその自心の佛、其の相いかんと云はゞ答へていはん、樹上に魚遊び水底に鳥飛ぶと。是れ何の道理ぞ、若し未だ明らめずんば已れについて見究めよ、見聞の主、是れ何物ぞ。光陰おしむべし、時人をまたず。

四　示下赴二臨終一病者上

汝が一靈の心性は、生ずる物にもあらず、死する物にもあらず。非ㇾ有非ㇾ無非ㇾ空非ㇾ色苦を受け樂を受くる物にもあらず、只今此の如く病苦を覺ゆる物は、さて何物ぞと知らんとすれども知られざる處について、さて此の病苦を受くる心體は是れ何ぞと案ずる一念より外には更に思ふことなく、願ふ處もなく、知る處もなく、たのむ處もなくして空中に雲の消ゆるに心なきが如くに終らば、則ち輪廻の道たえて直に解脱の時節あるべし。

五　示二一方居士本間將監一

覿面相逢。かれは是れ誰ぞ、云ひ得たるも蹉過す、云ひ得ざるも蹉過す、畢竟如何。剎竿頭上に犢牛子を生ず。爰に於て悟り去らば餘力を勞せじ。それ若し知らずんば自己方寸にかへつて、自ら佛性を看取せよ。佛性は人々具足し、箇々圓成して諸佛と衆生と同體にして高下なし。然るを世人錯つて無繩自縛して云く、見性悟道は我等が機根に及ばず、只看經禮拜して、諸佛の加被にあづかつて漸く道に入るべしと云ふ、聞く人亦爾りとす、是れを一盲衆盲を引くとす、是れ佛を信じ經を信ずるにあらず、正に是れ佛經を謗るなり。故いかんとならば、看經と云ふは、經を見る是れなり、佛といふは心性の異名なり。經に云く、心佛及衆生。是三無差別と。故に自心を信せずして佛を信ずると云ふは異名を信じて本體を嫌ふが如し。心性を見る工夫にはかなふまじ。只看經せんと云ふは、飢えたる人に粥飯を與ふれば、粥飯を食はずして、粥飯を記したる目錄を見て飢をやめんと云ふが如し、諸經は是れ心性を記したる目錄也。經に曰く、修多羅の敎は月を標す指の如し、指を知りて月を見ずんば爭

でか佛意にかなふべき。人々盡く一卷の經あり、刹那も自性を見ば、手に經卷をとらず、目に文字を見ざるとも諸經を一時に讀み得て一點をも殘すことなし、是れ眞實の看經にあらずや。見ずや青々たる翠竹、是れ道人の心、鬱々たる黃花皆般若にあらずと云ふことなし。又禮拜と云ふは、人我の幢を倒して佛性を悟る是れなり。然らば則ち成佛を求むる人、機の勝劣を論せず、自ら見悟すべし。いかんがせん、たま〳〵此の理を信じて工夫をなす人の未だ大悟せざるに中路に滯らんことを。或は思量分別しばらくやみて、無念無想なるを悟とし、或は一則の公案を忘れざるを足りぬとし、或は諸の戒體を犯さず、世間の是非をのがれて、山林に居するばかりを道とし、或は一法の悟るべきなし、何の道をか求めん、茶に逢うては茶を喫し飯に逢うては飯を喫すと云て、佛法を問はれては或は喝し或は袖を拂て去て萬事に滯らぬ摸樣を好んで道とし、工夫をなし、善知識を求むる者をば鈍なりとす。是底の人を道人とせば、三歲の孩兒も禪を會すべし、或は照を絕し意路を絕して枯木石頭の如くなるを無心の道とし、或は胸中空然として內外隔なきこと青天白日の如く、通身に輝き透りて、歷々分明なるを肝要とす。是れはこれ法性の現前する時節なり。未だ實悟にあらず、古人是れを解脫の深坑といふ。この見解の人、法に於て疑なしと云つて空腹高心にして問答宗論を好み、人に勝ちたるを樂みとし、負けたる時は嗔恚を起し心中憤々として、因果を撥無し、高聲多言にして、戲を好みて他人の行道を妨げ人の實頭なるを見ては遲鈍なり、是れ禪宗にあらずと欺く。譬へば狂人の不狂人を笑ふが如し。憍慢日々に增長して地獄に入ること箭の如し。初祖の云く、一切空なり、と云つて因果を知らざる人、無間黑暗地獄に落つと。縱ひ口に說く所は相似たりと云ふとも情識を如何せん。初心の學者多くは法性の現前するを認めて悟とす。古人の云く、法性の身、法性の土、明に知んぬ、是れ光影なることを。光影を弄する底の人を識取する、是れ諸佛の本源なりと。或人の云く、修行をなす故に種々の見解あり、見解皆心病なり、かくの如くならば容易に悟ることあるべからず。心を悟り佛性を明めずとも諸の罪をだに造らずんば、何のとがかあるべき。成佛せずと云ふとも三惡道にだに墮ちずんば、必しも悟を求めて何かせん。答て曰く諸罪の根元は是れ迷情なり、悟らずんば消滅すべからず。衆生の心中に六根あり、各六賊あり、六賊に各三毒あり、所謂貪嗔癡なり。一切の有情の類の中に三毒を具足せざる物なし、三毒を因とし、三惡道を果とす、因果必然たり。我罪なしといはん人は、此の理を知らざる者なり。縱ひ別に生涯罪を造らずとも、元來具足の三毒あり、況や、此の上に數罪を造らん人をや。問うて云く有相皆三毒を具足せば、佛祖聖賢なりとも、誰か三惡道を免れんや。答へて云く、只自性を悟る時、三毒轉じて戒定慧となるべし。佛祖聖賢は皆見性の人なり、何の罪かあるべき。問うて云く、見性の人は三毒を轉じて戒定慧となすべし。先にいふ處の妄見の心病をば、何を以

て治すべきや。答へて云く見性是れ萬病の一藥なり、別に治方を借る可らず。前にいはずや、光影を弄する底の人を識取する、是れ諸佛の本源なりと、自己の佛性は金剛王寶劒の如く、あたる者は卽ち喪身す、大火聚の如し、近づく者は皆失命す。若し一度見性すれば多劫の業識、一時にやぶれて、從來の習氣刹那に滅却すること紅爐の上の一點の雪の如し、佛見法見すら猶存せず、何の心病か殘らんや。只一切の無明業障、諸の知見解會の斷除せざることは眞實見性せざる故なり、自性を悟らずして輪廻を免かれんと思はゞ、猶たき火を除かずして湯のにゆること止めんとするが如し、此の理あることなし。居士幸に敎外別傳の旨あることを信せらる。如是文字言句を求めて何かせん、一切の道理義味直下に放捨して、端的に渠を見よ、卽今見聞する底の主人公畢竟じて是れ何ぞや、若し古きに依て心を名け、性と名け、佛と名け、本來の面目と名け、本地風光と名け、公案と名け、有と名け、無と名け、空と名け、色と名け、知と名け、不知と名け、眞と名け、妄と名け、語をなし、默をなし、悟となし、迷となさば、當面に蹉過す。若し又疑はんと擬せば、無繩自縛なり。只名け難く言ひ難き處を直に知らんとすれども知られず云はんとすれども言ひ得ざる間、通身疑になり返て、底にとほりて見るに身中に心とも性とも名くべきもの一もなしと云へども、聲あれば卽ち聞き、名をよべば卽ち應諾す、直下に落居せよ、渠は是れ誰ぞ、意路絕し力盡きて、いかんともせられざる所に步をすゝむること、大火坑の中へ手を放つて走り入るが如く、進んで自己本分の金剛の焰の中へ入り得ば、心意識情、知見解會、命根と共に滅却して本源の自性の現成すること、死果たる者の再び蘇る時諸病一時に斷除して安穩快樂を得るが如し、自由自在の分あるべし。正恁麼（しやういんも）の時、方に知るべし、水を踏むこと地の如く地を蹈むこと水の如し終日に說きて未だ曾て說かず、終日に行きて未だ曾て行かず、終日に喫して未だ曾て喫せず。南山に雲起つて、北山に雨降り、大唐に鼓を拍てば新羅に上堂すと云ふことを。乃至大室に獨坐して十方の諸佛に相見し、一字を見ずして七千餘卷を看つくし、一切の功德の藏、萬行衆善悉く自己方寸の中に圓具して、一法をも存せず、是れ此の時節を知らんと要すや。龐居士、馬祖に問ふ、萬法と侶たらざる是れ何人ぞ。馬祖の云く、儞が一口に西江水を吸盡せんをまて、儞に向つて云はん。居士言下に大悟す。汝いかんが一口に西江の水を吸盡せん。若し此の語を會得せば、千句萬句、一時に透りて水を踏むこと地の如く、地を踏むをこと水の如しと云ふことを知るべし。若し又誤つて神通妙用となさば閻老の前に向つて熱鐵丸を呑む日あるべし。若し神通妙用となさずんば、何の道理とかなさん、急に眼をつけて看よ。

六　依正法庵主強所望與之

少年より一の疑起りて候べし、抑も此の身を成敗して、何ぞと問へば、我と答ふる物は是れ何物ぞと、一念疑ひ初むるよりして、歳の重なるまゝに、疑ひ深くなるによりて出家せんと思ひ立ち候ひしとき、一の大願力起りて候べし。とても出家するとならば、獨り一身の爲に道を求めじ、諸佛の大法を悟りて、一切衆生を度し盡して後に、正覺を成すべし。又若し此の疑を明らめざらん中に、佛法を學せじ、また僧家の禮を學せじ、人間に交らば、善知識の下と山とより外に身を置かじ。出家の後、ことに疑も深くなるに從つて、此の願も深く起りて候ひしやうは、前佛巳に涅槃し後佛未だ世に出でたまはざる中間に、佛法の絶えんときに於て、無佛世界の衆生を度せんに、さはりなき程の大道心を起さばや縱ひ此の愛見の罪によりて、無間地獄に墮つるも衆生の苦にだにかはり得べくば、少しも退屈することなくして、生々世々未來際を盡すまで、此の願を失はじ。又修行に於て、生死相見に滯らじ。又小善根を修して、寸の暇を費さじ。又自らその力至らざらんに、人を利益して、人の眼をつぶさじと、此の願ひ心のくせとなりて、工夫のさはりとなり候ひしかども、止むことを得ずして、諸佛に對しても、常に此の願をたつして候ひしほどに一切の善惡の緣に對する時も、只此願ひを行とし、諸天の眼を友として今に至りて候ふ。かやうの妄想の境界を申し候こと無益に候へども强いて御尋候ほどに身が初心の時の所願をかき付てげんざんに入り候なり。

七　與古澤尼公

卽心を顯はすことに候と承り候。いかやうに顯はれて候やらん、目に見え心に知らるゝ程の物は卽心にてはあるまじく候。始めて坐禪せん人、卽ち自心を見るべし、念のうすくなるに從ひて、念の起るが知らるゝとき、是れを止めんとたゝかふは誤りなり。是れを厭はず愛せずして、只念の起る源を知るべし。此の念いづくより起るぞと疑へば心のやる方なくして、一念不生なるとき、其のまゝにて久しくうち向きて見れども、疑未だ破れざる、此の心これ何物ぞと底に透りて見るとき、疑の心急に打失せて我が身の中に何もなくして、十方の虛空と隔なし、是れ道に入り首て是卽心也、是如法也と思はゞ魚目を認めて眞珠とするが如し。是の見を久しく心にとむる者は驕慢の心高くして佛を罵り祖を罵り因果を撥無して今生にては魔に侵され來世にては惡道に墮つべし。然りと雖も是れを緣として終には悟るときあるべし。是れほどの理邊をだにも辨へず、自心の佛なることを信ぜずして心の外に佛を求め法を求むる者は、有相執着の外道には百千萬倍の劣りなり。さきに云ふが如くなり。見解の起らんときは急ぎ善知識に參して我が見る處をありの儘にあけて打破るゝことあらば、氷の湯に入るが如くにして、明月照し、虛空破れて、本來の面目を我に還し得るとき、始めて鐵鋸三臺を舞ふと云

ふことを知るべし、鐵鋸とは鋸なり、三臺とは舞の名なり。自ら見よ鐵鋸三臺を舞ふ、是れ何の道理ぞ、了簡を加ふる事なくして、眞直に疑ひて見るべし、是れ常の道理にあらず、悟りて始めて知るべし。又斷食すべき由承り候。斷食は外道の法にて候、かまへて〳〵せられまじく候。心中に惡知惡見の得失是非を破るを斷食とはいふ也。工夫一遍になりて妄念なきを長齊とは云ふなり。少しも奇特不思議の思をなし、人にかはらんとせば皆惡見なり。只心をゆる〳〵と眞向にうちなして人の是非を目にかけず、心人にそむかずして、しかも一切皆夢幻なりと觀じて、歎きの厭ふべきなく、喜びの求むべきなしと知りぬれば目にそひて心おだやかになり、情識とらけば病氣も次第になほるべし。心に悟る悟をだにも捨つべし、況や目の前に疑はん幻をば、何の形にてもあれ、みな忘想なりと見て、尊ぶべからず、厭ふべからず、兎も角も是れにいろはずして只見る主是れ何物ぞと見るべし、御狀に承り候趣について委細に申すなり。此の文を讀みて御覽じて、少しも違はず此のやうに餘念なく修行候はば、縱ひ今生に悟ることなしと云ふとも、來世に必ず正見の善知識にあひて、一聞千悟せんこと疑ふべからず。さのみかやうに細に申し候こと本意にあらず候へども、長病の中により承り候間默止難く候ひて、心得やすきやうに申し候也。

八　井口禪門返答

御狀委細に承り候處、未だ此の公案にはあたらず候。六祖の云く幡の動くにあらず、風の動くにもあらず、汝が心動くなりと。若し是れを見明らめば天地と我と同根、萬物と一體にして微塵ばかりも別の物なし、溪の聲も風の音も、主人公の聲なり。松の青きも雲の白きも主人公の色なり。我が手をあげ足を動かし、色を見聲を聞く者と全く別ならず。若し智慧をからず料簡にわたらず、直にかくの如くに悟り得れば少し自己の見處ある人なり。未だ眞の悟にはあらず。古人の云く、自己清淨法身をとむることなかれ、又云く四大の色身、說法聽法を解せず、虛空、說法聽法を解せず、いかなるか是れ聽法底の物と、此の心は身も聲をきかず、さてなにか是れ聲をきくものと云へり。爰につきてよく直にとほりて御覽ずべく候。この公案を見ること、金剛王寶劍を提ぐるが如し、一切心に生ずる物をきり盡すべし、世法來らば世法をきり、佛法來らば佛法をきり、迷來らば迷をきり、悟をもきり、佛をもきり、魔をもきり十二時中、如何是聽法底の物と提ぐべし。一物なくきり盡して、虛空をもきり破るとき、自己の心やぶれぬれば聽法底の物顯はるべき也。努め〳〵道中に止らずして、死して再び蘇へるが如くなるとき、始めて大事を明らめ候べく候。こなたへさい〳〵御音信候はんこと御煩ひなされ候

間、かやうに申入れ候。御一見の後は火にうちくべらるべし。御返事。

又

御文委しく見まゐらせ候。さても是れ迄思召立ち候ひし御志、今にありがたく思ひ奉り候處に、此の大事において御忘れなき由承り候、殊によろこび入り候、此の御返事委しく承り候。只是れにて申し候ごとく、自ら本性を公案となして御覽ずべく候。抑もかくの如く聲をきゝ、此の如く物を云ふ主は何物ぞと見るとき、萬の念は起り候とも、それには兎も角もいろはずして、只是れ何物ぞとばかりつよく疑ひ候時、念も心も打失せて空に曇なきときのやうになり候。心と云ふべき物は是れほど形もなきに、さて何物がかくの如く聞き、かくの如く動き働くぞと、いよ／＼疑ひて世間の萬事を忘れはつる程に工夫候はゞ、必ず悟ること寢入りたる者の夢のさむるやうに候べく候。此の時必ず枯木に花さき、氷の中より焔のたつこと疑ひなし。此の時佛法、世法萬の善惡皆昨日の夢になり候ひて、只本性の佛獨りあらはれ候べく候。其の時は此の一心本性の佛とも、又心にとむべからず、とゞむれば心の有となり。御志有難く候まゝ、かやうに委しく申し候なり。又結粽五百把茶一斤給はり候事よろこび入り候。

又

御文委細に承り候。さては工夫の趣承り候こと有がたくこそ候へ、御返事に委しく申して候はゞ定めて辭について御心得候ひて了簡候はゞ、なか／＼さはりとなるべく候。かやうに問はんと思ふ主をまつすぐに極めて御覽なされ候へ。只此の心もとより佛にて候とこそ佛祖も云はれて候へ。然りと雖も夢幻の如くなり、此の身に於て何をか心とも佛とも名くべき、只此の名けられず知れざる處について大に自ら疑ふべし。抑も只今手をあげ足を動かし、物を言ひ聲を聞く主は是れ何物ぞと見るとき、心の道たえ、方便つき果て、いかんともせられざる中に、いよ／＼疑ひて、名をはなれ了簡をやめて、萬事を捨てはてゝ、是れを思ふこと只是れのみなる志、底にとほりて一片ならば必ずさとること有るべし、暫く念のおさまりたるとき、空々として何もなき處と見て、悟と思ふべからず。此の時念を起さずして、しかもいよ／＼疑ふべきやうは、是れほど心といふべき形もなきに、萬の物の聲をば、さて何物が聞くぞと極むれば、虛空やぶれて、父母未生の本來の面目彰はるべし。譬へばいたく寢入りたる者の俄にさむる時、萬の夢則ちやぶるゝが如し。左樣に候はんとき、急ぎ善知識にありて、其の批判にあづかるべし。若し此の生に悟らずんば臨終の時も、只工夫の中にて火のきゆるやうになりて別の用心を雜ゆることなくば來世には生れながら悟るべしと、古人たち多くかやうにいはれ候、御望に從ひてかやうに申し候こと憚入りて候。一遍御覽候ひて後はやがて火にうちくべらるべく候。二度

と是れを御覽候はで只此の聲を聞く物に深く眼をつけて、自ら悟ればかやうの言は、皆徒らことにて候あなかしく

九　井口殿御返事

御文委細に承り候、かやうに御念ごろに御工夫候はんこと有がたく候。抑も承り候處、少し相似たることも候へども、只心の知る處にて候。一大事は心のしる物にもあらず、智慧の量るべきにもあらず、悟りて明なる處にても、皆妄想の類にて候なり。先の狀に申し候死したる者の蘇へるが如くなるとき、聲を聞く者の彰はるべく候と申して候ひしにつきて、いかなるか是れ聽法底の物と提ぐるとき提ぐるより外には微塵ばかりも物なきとき、此の聲を聞く主の彰はれたると御心得候こと、大なるあやまりにて候。劍を提げて一切の物をきるが如くに、此の公案を提ぐれば、心に存する所の物、皆きり失ひて、虛空もきり破りて此の如く提ぐるより外に何もなしと承り候。さて此の如く提ぐるものは何物ぞと爰を極められ候はゞ、聲を聞く物と別ならず。爰を極め盡さすば縱ひ幾度悟りて、佛法をしる處明なりとも未だ生死の根源をきらざる人にて、口にて法門を云ひ得たるばかりにて心の中には妄想止まざる間、來生には必ず三惡道に墮つべし。然りと雖も爰に止らずしてまぼり死にしたらば、來生には必ず生れながらに悟るべし。ゆめ〳〵退屈ある可らず又、怠るべからず。只よく此の公案を御覽じ候ひて身も聞かず虛空も聞かず、さていかなるか是れ聲を聞く物と極むるとき、了簡を加へず、あひはからふ處なく、悟をまつ心なく、用心にわたる處なく、更に心の行方なくして、いかんともせられぬ處に於て、悟も智慧もうせ果て、木石の如くなる處にとゞまらずして、日久しく極めもてゆかば必ず大に悟りて、生死の根源をきり無心の田地に至るべし。生死の根源といふは情識是れなり。自己の心とも云ひ人我の心とも云ふなり。古人の云く別に悟なし、たゞ凡聖を盡せと。只この己れを盡すこと悟の上の大事なり。かやうに委細に申し候こと外見憚りなりと雖も、わざと是れまで御狀給り候間、もだし難く候て申すなり。

十　又比丘尼之御返事

御文委細に承り候。何事よりも御修行の趣、細に承り候と有がたく思ひ候、京へ登らば西へ行くべきやうに思ひけるはあやまり也。いづくも京にてありけると御覽候ひて後、猶ほ茫然として是れ何ぞより外は力とせずと仰せ候は、いづくも都とは知りたれども、未だ王に對面せざる故なり。王とは我が父母未生以前の本來の面目なり。少しの疑やぶれつれば。我が心虛空の如くにして佛もなく衆生も

なく、古もなく今もなし、胸の中心安くして只明なる月の影の世界を照して、しかも其の形取出されず人に向ひて言ひあらはされざるが如し。是れ少しの工夫のしるしにてはあれども猶ほ心の病なり。是れを自己の顚倒とも云ひ又生死の根源とも申すなり。是れを打破るを根源をきるとは申す也。道心なき人、是れを以て古人の公案を推量しあつめて、悟る處ありと思ふなり。只悟らるゝ處を愛せずして。直に悟る主をきはむるとき、先の見解は皆やぶれ失せること、火の物を燒くが如く、劍の物をころすが如し。善惡の相髮筋ばかりもなき處について是れ何ぞときはめ盡すとき、死果てたる者の蘇へるが如くなるときに至りぬれば主人公あらはるゝなり。德山の云く道得たるも三十棒、何としてか此のとがを免れんや。若し此の杖をのがれ得たらば、東山水上行と云ふことを知るべし。かやうに申し候こと憚りに候へども、御志ありがたく候ほどに申し候。是れは身が申すにては候はず候。善知識たちの仰せ候ひしを承り候分を申し候なり。

拔隊假名法語　終

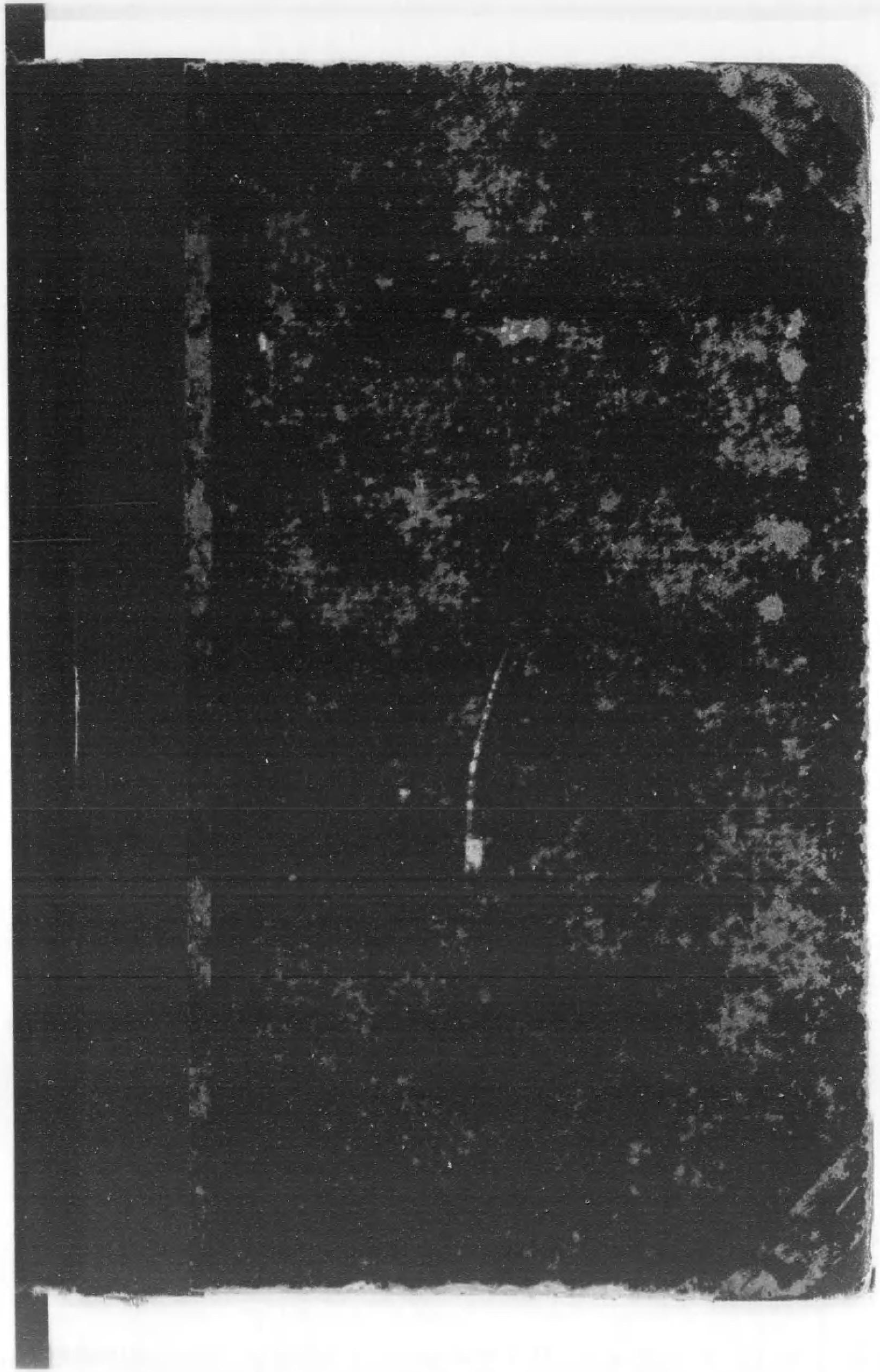
大正五年八月五日印刷
大正五年八月八日發行

禁複製又轉載

現代相似禪評論
。定價壹圓五拾錢

著作者　破有法王
發行者　東京市牛込區喜久井町貳拾壹番地　富永一郎
印刷者　東京市神田區三河町壹丁目拾四番地　太田泰助
印刷所　東京市神田區三河町壹丁目拾四番地　丸利印刷所

發行所　東京市牛込區喜久井町貳拾壹番地　周文社

324
506

終